



ビーチャムの 引き裂かれた日々

多重人格者
サリー・ビーチャム

富田満留



23歳のクリスティン・ビーチャム（仮名）は、ニューイングランドに住む理知的な女子大生だった。彼女が神経衰弱の治療のためにモートン・プリンス博士のもとに通うようになってからまもなく、博士は、彼女の心の中にいくつもの異なった人格が存在することに気がついた。しかも、それぞれの人格は、ほかの人格の行動や考えについて、ときには部分的に、ときにはまったく、知らなかった。それぞれの人格（ビーチャムI、サリー、ビーチャムIVなど）は同一人物だが、彼女の肉親以外には誰も（同級生や友人や教授たちのなかの誰一人）彼女の病気にまったく気づいていなかった。プリンス博士は、長年にわたる治療のすえに、彼女の中の異なった人格を統合し、調和させ、本来あるべきビーチャムの人格を再構成することにほぼ成功した。こうして、最終的には、いくつもの人格は一つになった。しかし、これから示すように、ビーチャムの異なった人格は、最初のころは互いに敵対していたのである。

ビーチャムは、1日5セントから10セント（現在の約3ドル）のわずかな小遣いを小出しにわたされるといいういじめを受けることになった。ビーチャムは、ある日帰宅してからおよそ24時間後に、1回めの金が添えられたサリーからの初めての手紙を受けとった。その手紙は、今後家計のいっさいは自分が管理し、ビーチャムに1日10セントまでの小遣いだけをあたえるという内容だった。1日10セント以外のすべての金は、すぐに取りあげられてしまった。どんなにサリーに懇願しても、ビーチャムはそれ以上の金を持つことは許されなかった.....

しかしこれは、ビーチャムが味わったさまざまな責め苦のほんの一部にすぎなかった.....。彼女は、郵便切手も取りあげられてしまい、自分に割り当てられたわずかな小遣いでは、切手を買うことも、電車に乗ることもできなかった。おかげで、彼女はどこへ行くにも歩いて行かなければならなかった。手紙を出したいときは、書いた手紙をテーブルの上に置いておくように、暴君のサリーから命じられた。そして、サリーが手紙を出すことを許可した場合には、手紙に切手が貼られてテーブルの上に置かれていた。もし切手が貼られていない場合には、出すことはできず、それでおしまいだった。

「彼女は手紙を書きすぎなのよ」

と、サリーはプリンス博士にそう言った。「これからは、わたしが選んだ相手以外には、手紙は出させないわ。それに、わたしがあたえた金以外には、たとえ1セントだって彼女には持たせないつもりよ」

ビーチャムは、クモや蛇やカエルに病的な嫌悪感を抱いていた。そうした生き物が体に触れようものなら、恐怖でパニックに陥った。ある日、彼女の部屋にきれいにリボンをかけた小さな箱が置かれていた。あたかも、自分への贈り物のようだった。箱を開けてみると、6匹のクモが飛び出してきた。

「彼女ったら、ものすごい悲鳴を上げたのよ」

と、サリーは言った。「箱を開けたとたんに、部屋じゅうにクモが散っていったんだもの」

サリーは、ビーチャムへの贈り物にするために、田舎の野山まで出かけて行ってクモを集めてきたのだった。

ビーチャムはいろいろな嫌がらせに絶えず悩まされたが、その一つが、毛織物を織っているとき、いくら織っても次々とほどかれていくことだった。あるときビーチャムは、ごく親しい友人から、赤ん坊用の毛布をつくってほしいと頼まれた。彼女は毛布づくりに熱中し、1日も早く完成しようと精を出した。彼女は何か月も毛布を織りつづけたが、あと少しでできあがるというところまでくると、いつも知らないうちに、毛糸がほとんどほどかれてしまっているのだった。ビーチャムは、そのことで何度もプリンス博士にぐちをこぼした。こうして彼女は、何度も何度も最初からやり直しをしなければならなかった。それでもどうにか毛布はできあがり、あとはその友人に送るだけになったとき、ついに事件が起きた。サリーは、毛糸を全部繰り出すと、ほどいたその毛糸を部屋じゅうの家具に巻きつけ、それから壁の絵から絵へ張りわたし、そしてまたいくつもの家具の後ろに通して、そのあと自分の体にぐるぐるに巻きつけ、それからまた部屋じゅうの家具の後ろに通して、最後に毛糸の先をベッドの下に隠した。そしてサリーは、毛糸が縦横に絡み合った部屋の真ん中に立つと、ビーチャムにバトンタッチした。毛糸はどうしようもないほどこんがらがっていて、目覚めたビーチャムは、そこから抜け出すために毛糸を切るしかなかった。

サリーのいたずらのなかには、ビーチャムの健康に深刻な悪影響をおよぼすものもあった。ビーチャムの体力では耐えられないような長い距離を歩かせたのだ。あるときサリーは、郊外の町（ウォータータウン）へ行き、そこからビーチャムの足ではとうてい行けないほど遠くまで歩いていき、疲れ果てた彼女をそこに置き去りにした。見知らぬ山野で目覚めたビーチャムは、くたくたに疲れ、自分がどこにいるかも分からず、帰り道を知る術もなく、途方に暮れた。

何とも不思議な現象のひとつは、たとえばこうした強行軍のあと、サリーとビーチャムとでは体調にまで違いが出てくるということだった。ウォータータウンへの遠出から帰ったあと、ビーチャムは、2日たってもまだ疲れがとれず、体力は消耗しきった状態のままだった。しかし、プリンス博士の目の前で突然人格がサリーに入れかわると、彼女は強行軍の疲れなどどこにもなく、元気いっぱいだった。ところが、再びビーチャムが入れかわると、そのとたんにまた疲れがどっとぶり返すのだった。

サリーは、ビーチャムにつまらない嘘をつかせて楽しんだ。また、ビーチャムの気位の高さを逆手にとって嫌がらせをした。ビーチャムが体裁をひどく気にすることを知っているサリーは、彼女をいじめるために、別の椅子や、ときには暖炉の上に両足をのせて、座らせることがあった。ビーチャムは足を下ろすことができず、恥ずかしくていたたまれぬ思いでそこに座っていなければならなかった。またサリーは、ビーチャムが何日も苦勞して書きあげた大学のレポートを破り捨てたことも、数え切れないほどあった。

サリーは、ビーチャムに惨めな思いをさせるのが楽しくてならなかったが、ときどき度を超してやりすぎたために、ビーチャムが心勞のあまり寝込んでしまうこともあった。すると、驚いたサリーは、プリンス博士に手紙を書いて助けを求めた。

「わたしは、ビーチャムに何もしてあげられないわ。彼女には、あなたの助けがどうしても必要なの……」

ビーチャムが受けたさまざまな嫌がらせのなかでも、彼女がいちばん気に病んでいたのは、サリーからの手紙だったようだ。彼女は、サリーから次から次へとおびただしい数の手紙を受けとった。ビーチャムが手紙を読まないでいると、同じ文面のメッセージを書いて壁紙に貼りつけ、読まざるを得ないようにした。

ビーチャムの小さな弱点まで知りつくしているサリーは、彼女の神経質なところや貞操感の強いこともよく知っていて、実に手の込んだやり方で彼女を責めさいなんだ。サリーは、いろいろな人々に宛てて手紙を書いた。手紙の内容は、ビーチャムのプライバシーの一切合財をはなはだしいほどに誇張したり歪曲して伝えるものや、ときにはまったくの作り話を吹きこもうとするものだった。サリーは、ビーチャムにはできもしない突飛なことをやろうと他人に申し出たり、彼女がとうてい受け入れられない約束をしているように見せかけたりもした。いずれも、ビーチャムをびっくり仰天させるような内容だった。サリーは、こうした手紙をほんとうに出すつもりはなかったが、ビーチャムの目につくところに封をしないで置いておいた。ビーチャムは、手紙の内容を真に受け、まるで火薬庫のなかで暮らしているような気分になった。とはいえ、サリーはときどき、自分自身の考えを手紙に書いて出すこともあった。ビーチャムは、こうした手紙の内容を友人や返事の手紙から知ることになったが、それは彼女自身の考えとはおよそ相いれないものだった。

こうした手紙のなかでも、プリンス博士にとっていちばんやっかいだったのは、博士のビーチャムに対する感情をサリーがねじ曲げて伝える手紙だった。たとえば、サリーは、ビーチャムが約束を破ったり嘘をつくことに博士が腹を立てていて、もう二度とこないでほしいと思うほど彼女を迷惑がっている、といったことを書くのだ。サリーのもくろみは、ビーチャムの治療をじゃますることだった。プリンス博士は、サリーの言うことを信じないように再三注意したが、ビーチャムはサリーのことばをいつも真に受けてしまうのだ。そして、記憶が「欠落」している時間に自分が何をしたかまったく覚えていないのだと訴え、失礼なことをしたならすべて許してほしいと、すっかり意気消沈した手紙を博士に寄越すのだった。

サリーは、ビーチャムを憎んでいた。その憎しみの理由は、ビーチャムも薄々感づいていた通り、明らかに嫉妬だった。サリーは、誰もがビーチャムのこれからの身の上を心配しているようだが、自分の運命については少しも心配してくれないと、しきりに不平をもらした。またサリーは、ビーチャムはとても大切にあつかわれているのに、自分は子どもっぽいとか、無責任だとか、約束を守らないと言われて、ひどく傷ついている、とも言っていた。

「わたしがどうなるかなんて、誰も心配してくれないわ」

と、サリーは繰り言のようにぐちをこぼした。

モートン・プリンス博士は、なぜビーチャムにしつこく嫌がらせを続けるのか、サリーにその理由を問いただしてみた。

「だけど、どうして君はビーチャムを憎むんだね。君は、自分自身を憎んでいるだけなんだよ。彼女は君自身なんだから」

「いいえ、違うわ」

と、サリーは憤然と言い返した。「そんなことないわ！ 同じ人間なんかじゃない。わたしたちは、考え方も感じ方も全然似てないわ」

サリーは、自分とビーチャムの相違点を次々と並べたてた。彼女はしだいに怒りをつのらせ、最後にこう言った。

「たしかに、わたしは彼女を憎んでいるわ。彼女は、わたしが自由に生きる（サリーが実在する個人として生きる）ことをじゃましているのよ……わたしは、思いつくことは何でもやってやるわ……このあいだなんか、彼女の髪をばっさり切り落としてやろうと思ったわ。だけど、彼女ったら、その前に目をさましちゃった。きっと、はさみのせいで起きちゃったのね」

「君は、君自身の髪を切ろうとしたんだぞ。彼女の髪は、君の髪なんだから」

すると、サリーは声を立てて笑った。

「わたしの知ったことじゃないわ。髪を切ったら、彼女、きっと男みたいに見えるでしょうね——あのサルどもとおんなじになるよ。でも、わたしは自分のかっこうなんて気にしないわ」

こういうとき、サリーはビーチャムの存在をまったく意識に感じていないようだ。

「彼女は、いまどこにいるの？」

サリーは、しばしば博士にそうたずねた。

夏になると、また一人別の交代人格1) ビーチャムIVが現れ、サリーやビーチャムと合わせて3つの人格が入り乱れ、まるでコメディの舞台のような1人3役が演じられることになった。同じ人間が2人いるだけでも、状況は十分やっかいだったが、いまや3人となって、事態は目も当てられないほど錯綜してきた。

プリンス博士は、7月と8月のあいだ、ビーチャムやサリーと手紙のやりとりは頻繁にしていたが、2人と直接会ってはいなかった。しかし、彼女たちの行動については、あとで知ることができた。それぞれの人格は、ほかの人格の都合などおかまいなしで、自分のやりたいようにやり、大混乱に陥った。気の毒に、ビーチャムはすっかり落ちこんでしまい、絶望的な気持ちになっていった。

ビーチャムは、「多くの時間（夏の大半）」を失っただけでなく、いくつもの貴重品をなくした。ネックレスや腕時計、いくつかの指輪、そして、人から借りた何冊もの本をなくしてしまったのだ。ビーチャムは、サリーの手紙から、自分が大金を借りて、その金をたちまち使い果たしたことを知った。もちろん、ビーチャムには、いったいどうしてそんなことになったのか、さっぱりわけがわからなかったし、自分の貴重品がどこへ行ったのか見当もつかなかった。どんなささいなことも、サリーの手紙を通じてしか知ることができなかった。ビーチャムはまだ、自分の中にいる別の人格が1人ではなく2人に増えたことを知らなかった。

借金をしたのも、ビーチャムが大事にしていた指輪をなくしたのも、ビーチャムⅣの仕業だった。ビーチャムはその指輪に鎖を通して首から下げ、肌身離さず持っていたのだが……。それ以外の指輪は、ビーチャムが推測した通り、ほんとうになくしたのではなく、見つけれないだけだった。これは、「負の幻覚」2)の作用だった。ほかの指輪は、文字通り目と鼻の先ほどのところにあっただが、負の幻覚によって、ビーチャムにはその指輪が見えなかったのだ。サリーは、なくさないように指輪にリボンを通して、首に巻いていた。その指輪は、あとで見つかった……

ビーチャムは、夏のあいだ何週間も引っこんだまま姿を現さなかった。その間は、サリーとビーチャムⅣが交互に入れかわり、自由気ままな生活を思う存分楽しんだ。ビーチャムⅣは、自分の思い通りに、家の中を取り仕切った。そのやり方は、ビーチャム（以後ビーチャムⅠと記す）の好みとも合っていた。サリーは、ビーチャムⅠの神経をいらだたせるためだけに、ビーチャムⅣがしたことをそれとなく彼女に教えた。

ビーチャムⅠは、なくした貴重品を見つけることができず、借金を返すために、ニューヨークへ出稼ぎに行くことにした。ところが、どういうわけか、ニューヨークではなく、ニューヘブン行きの乗車券を買ってしまった。ビーチャムⅠはニューヘブンに着くと、その足ですぐYWCAに行き、仕事を世話してほしいと頼んだ。そこで、ウエートレスはできるかと言われ、やってみると答えると、ホテルのウエートレスの仕事を紹介された。彼女がそのホテルで働いたのは、二日間だった。すべてはうまく行っていたのだが、あの「おバカさん」（サリーがビーチャムⅣにつけたあだ名）が入れかわり、いつの間にか自分がウエートレスをしていることを知った。彼女は、ウエートレスの仕事が嫌で嫌でたまらなかった。それでも、むかつ腹をおさえて、しばらくはウエートレスを続けた。

しかし、とうとう「おバカさん」はもう一刻もがまんできなくなり、S夫人のところへ行って、この仕事は自分の性に合わないのでやめたい、と言いだした。ビーチャムⅠをととても気に入っていたS夫人は、ひどく残念がって、彼女を引きとめようとした。しかし、それがむだだとわかると、夫のS氏が帰ってくるまで待ってくれば、給料を払うと言った。しかし、「おバカさん」は待たなかった。彼女は、給料はいらないと言って、すぐに出ていった。駅に着いて、辻馬車の料金を払うと、持ち合わせの金が一ドルも残っていないことに気がついた。これでは、列車の乗車券は買えない。そこで、腕時計を質に入れて4ドル借り、ボストンまで帰った。

そのあと、ビーチャムⅠは腕時計がなくなっていることに気づいて、すっかり気落ちしてしまった。その時計は、知り合いから借りたものだったからだ。いまや、金をなくしたうえに、人の時計までなくしてしまった。サリーのおかげで、腕時計が質屋にあることがわかり、あとで請け出すことができた。もっとも、「おバカさん」にしてみれば、その腕時計はそもそも（ビーチャムⅠが知らないうちに）自分の腕時計と交換して手に入れたものだから、どうしようと自分の勝手だし、そのうえ質札も大切にしておいたのだから、何も悪いことはしていないわけである。ボストンに帰ったあと、ビーチャムⅠが目を見ましたとき、彼女は大通りの見知らぬ下宿屋にいた。そこは、サリーが選んだ場所だった。

この一連の事件で、ビーチャムⅠは失意のどん底に落ちこみ、すべてに終止符を打とうと思いはじめた。ボストンにもどってまもないある夜、ビーチャムⅠは部屋の窓を密閉し、ガス栓を開いて、床についた。

しかし、サリーがすぐに目をさまして、ガス栓を閉め、窓を開け放ち、彼女の命を救った。この自殺未遂の一件は、サリーにとって相当ショックだったことはたしかだ。彼女は、しばらくこのことをじっくり考えてみた。そして、もしビーチャムが自殺したら自分も死ぬのだろうか、プリンス博士に質問した。博士がその通りだと答えると、サリーは身震いして言った。

「そんなこと、させるわけにはいかないわ」

1899年から1900年の秋から冬にかけて、3つの人格は、依然として代わる代わる出たり引っ込んだりしていた。サリーは興味の対象を、ビーチャムⅠからビーチャムⅣに変更した。サリーは、ビーチャムⅣのほうが気に入ったのだ。感傷的で意気地のないビーチャムⅠにかまうのはやめて、ビーチャムⅣのほうへ自分のエネルギーを傾けることにした。そして、それまでビーチャムⅠをからっていたのと同じように、ビーチャムⅣをしつこくからかった。……サリーが大好きなアウトドア・スポーツや冒険や精力的な生活は、ビーチャムⅠにはできなかった。ただひとつの体に共存する3つの人格が、数時間ごとに、ときには1時間のうち何度も入れ替わり、それぞれの異なった生活を送ることがいかにむずかしいかは、想像に難くないだろう。その結果、これとやってやるべきことが何もないサリーは、ほかの2人をからかうことに楽しみを見出したのだ。サリーは、ビーチャムⅠを嫌っていたほどには、ビーチャムⅣが嫌いではなかった。ビーチャムⅣのほうが、ずっとからかいがいがあった。それに、嫌がらせに対するビーチャムⅣの反応は、ビーチャムⅠとはまったく違っていた。ビーチャムⅠは、サリーのすることにすっかりおびえきっていた。しかし、ビーチャムⅣは臆することなく、決然と自分の自由意志を貫こうとした。

1900年の4月になった。これまで10か月のあいだ、ビーチャムの中のそれぞれの人格は、不安を抱えながらも、どうにかやってきた。彼女は大学にもきちんと通っていたし、多少ちぐはぐなところはあったろうが、社会生活上の義務もそれなりに果たし、自分自身の日課もこなしていた。ほかの人々と同様に、彼女も1日3度の食事を取り、裁縫をし、家事をこなし、友だちづきあいもそれなりにやっていかなければならなかった。

サリーは、冬から春にかけて、自叙伝の大部分を書いた。しかし、途中で何度も中断されて、執筆はなかなかはかどらなかつたし、一度は大部分を書きなおし、そのあとまた一部を書きなおした。こうした生活全般にわたるさまざまな仕事は、やらなければならなかつたし、たとえそれが多分に突飛なやり方であっても、事実やりこなしていた。驚くべきことは、多重人格という彼女の事情を知らない人々に不審がられることもなく、すべてをやりこなしていたということだ。ビーチャムは、ときどき神経衰弱にかかる半病人と思われていただけだった。

ビーチャムⅠとビーチャムⅣにとって、いちばんやっかいだったのは、家の中の生活だったようだ。たとえば、身づくろい一つとっても、これが一苦勞だった。まず第一に、一度に2回以上続けてふろに入ることがあった。ビーチャムⅣは、自分自身がふろに入らなければ、すでに入っている絶対になんか納得しなかつた。ささいなことのようにだが、もしふろに入ろうとしたとき、同じ下宿に同居する友だちから、自分がついさっきふろに入ったばかりだということを指摘されたら、どう説明すればいいだろうか。彼女の入浴はしばしば2回ずつくり返され、そのたびに言いわけをしなければならなかつた。彼女は、表面的には適当に言いつくろってどうにかごまかしていたが、これがけっこうやっかいなことだったのだ。ビーチャムⅠのほうも、しばしば同じ羽目に陥った。

入浴が終わると、次は身づくろいである。たとえば、服を着はじめたのがビーチャムⅠだったとしよう。サリーが大切な品物を隠したりしていなければ、身づくろいは順調に進む。ところが、あと少しで終わりそうなところで、しばしばビーチャムⅣが入れかわり、何もかも脱ぎ捨てて、自分の好みに合った服に着替え、髪型も最初からセットしなおすのである。そのまま無事に身づくろいがすめばいいのだが、その前にまた運悪くビーチャムⅠが入れかわったりすると、また最初からやりなおさなければならなくなる。そのあと朝食になると、そこでもまたいろいろな問題が起きた。ほかにも、大学に出すレポートやノートや手紙がなくなることがよくあった。どこにあるのか、探してもわからない。サリーかビーチャムⅠかビーチャムⅣが、破り捨ててしまったのかもしれない……毎日がこういう調子で明け暮れるのだった。

ビーチャムが自分の病気を友人たちに隠したまま、無事に社会生活を送るなどということは、一見不可能なことのように見える。しかし、よく考えてみれば、困難ではあっても、不可能なことではなかったようだ。ビーチャムⅠもビーチャムⅣも、自分のことを人にはほとんど話さなかったし、人を遠ざけておく資質のようなものがあった。ビーチャムⅠは、自分の不安や憂鬱、そして病的なまでの悲嘆を、他人に知られまいとしていた。ビーチャムⅣも、自分自身が抱える問題を隠していた……サリーは、自分自身がビーチャムに成り変わりたいと思っていた。周囲の人々は、3つの人格が交代するビーチャムを、気分がころころ変わる「わけのわからない変わり者」と思い、まさか彼女の人格が入れかわっているなどとは、誰も想像していなかった。

記憶の欠落を隠すのは、思ったほどむずかしいことではなかった。人間は、その日に起きたさまざまな出来事を絶えず記憶にとどめているわけではない。必要になったときに、思い出すだけである。ビーチャムⅠとビーチャムⅣは、思い出せないことがあると、適当に話を合わせてあいまいな答えをし、推理や当て推量でなんとかその場をしのいだ。

ビーチャムも、絶えず苦渋に満ちた生活を送っていたわけではなかった。診療を続けていくあいだにも、平穏な一日を過ごせることが幾度もあった。ときには、比較的長い時間、心身ともにいくらか健康なときもあった。問題は、そうした状態がせいぜい数日しか続かないことだった。

サリーは、何度もビーチャムⅣの心の中を探ろうとしたが、なかなかうまくいかなかった。しかし、ついに努力は報われた。サリーは、巧妙な手を使ってビーチャムⅣの心を「揺さぶり」、彼女の心の秘密の部屋に侵入した。こうして何度か、ビーチャムⅣがそのとき何を考えているかを知ることができた。しかし、サリーは、禁断の部屋のドアを開けた青ひげの妻のように、事実を知って愕然とした。

「なんてこと、彼女は、わたしが想像していたのとは全然違ってたわ」

サリーは何度もわたしにそう言った。「彼女は、恐ろしい人間よ。まさかあんな女だとは、夢にも思わなかったわ」

事実サリーは、自分のいたずらに対してビーチャムⅣが憎悪をたぎらせていることを知り、たんに驚いたというより、ほんとうに肝をつぶしたのだ。サリーにとっては、たんなる遊びにすぎなかった。子ども同士がこづき合う程度のたわいないけんかのつもりだったのだ。しかし、いまサリーは、激しやすい性格のもう一人の自分が本気で腹を立て、いたずらの犯人である自分に殺意を抱いていることを知った。そして、たとえ遊びのつもりであっても、ビーチャムⅣがやろうとすることをじゃましてはならないということを悟ったのだった。

ビーチャムⅣの大きな不満の一つは、サリーの友だちの選び方だった。サリーの友だちは、ビーチャムⅣから見れば、気にさわる不愉快な連中ばかりだった。

「自分の友だちは自分で選ばせてもらいたいわ」

と、ビーチャムⅣは主張した。

しかし、サリーが誰とでも気楽に打ち解けてすぐ友だちになれるタイプだとすると、ビーチャムⅣが自分で友だちを選ぶことなどできるだろうか。ビーチャムⅣが目をさます（入れかわる）と、いつも知らないうちに、性格の合わない不愉快な連中といっしょにいて、心ならずも自分本来の人格とは異なる役柄を演じざるを得ない状況に置かれているのだ。たとえば、親密につきあっているらしいラマルティンという名前のフランス人の女友だちがいた。サリーとビーチャムⅠのどちらの友だちかははっきりしないが、おそらくサリーの友だちだろう。ラマルティンの性格や自分とは相いれない物の見方が、ビーチャムⅣにはどうにも気に入らなかった。

ほかにも、美大生の友だちが2人いた。ビーチャムⅣはこの2人のことはほとんど知らなかったが、サリーは彼女たちと親しくつき合っているようだった。ビーチャムⅣは、自分に対する彼女たちの態度にうんざりしていた。2人は彼女のことを、いつもおもしろくて、明朗快活で、おまけに軽薄な人間だと思っていた。しかしそうしたふるまい方は、ビーチャムⅣの性分には合わなかった。

そして、同じように気づまりだったのが、ビーチャムⅠとしての彼女しか知らないC牧師のような人々とのつきあいだった。C牧師は、彼女を病的なほど道徳心の強い不幸な人間とっていて、そのように彼女に接した。

しかし、ビーチャムⅣは、決してそんな人間ではなかったから、ビーチャムⅠのような高潔な役柄を演じることはむずかしかった。実際、彼女はビーチャムⅠの高邁な規範にしたがうことはできなかった。ビーチャムⅣには、サリーのように墮落した生き方ができないように、ビーチャムⅠのように高潔な生き方もできなかった。だから、彼女にとって、サリーの友だちが気に食わないのと同じくらい、ビーチャムⅠの友だちは退屈でしかたがなかった。ビーチャムⅠには、年配の女性の友人が大勢いた。ビーチャムⅠは、そうした友人の家をよく訪問し、彼女たちはビーチャムⅠを温かく迎えてくれた。しかし、彼女たちは、ビーチャムⅣにとっては「どうしようもなく愚かで退屈な連中」にすぎなかった。

こうして、3つの人格が入り乱れた生活は、それからもまだ続くのだった……

注

- 1) 交代人格：多重人格のそれぞれの人格。それぞれに性格が異なり、名前も違う。
- 2) 負の幻覚：存在するものが存在しないように感じる幻覚。